琉球大学学術リポジトリ

いちばん長い夜

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系 公開日: 2016-08-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ホセ・マリア・メリーノ, 鈴木, 正士 （訳）, José María Merino メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34786

いちばん長い夜

ホセ・マリア・メリーノ著
鈴木正士訳

ベナベンテの町にさしかかったとき、道路に大きく黄色い色で、迂回路と書かれているのが目に入った。その思いがけない指示に、何も知らずに車を走らせてきた彼は、不意につまずいたあとのように、思わず驚き困惑した表情を浮かべた。

ポンフェラダには月曜日までに入ればよかったので、週末はエル・ビエルソ郡のどこかの村に滞在する予定だった。そのため、あらゆる村がアルファベット順に紹介されている、オールカラーのガイドブックを購入していた。あと少しでエル・ビエルソ郡という所まで来ていながら、レオンの町の方向に迂回するなど納得できる話ではなかった。

レオン経由でポンフェラダに行くのは間違いなくたいへんな遠回りである。だが、とくに緊急な用事があるわけでもなければ急ぎの旅でもない。想定外の出来事を前にして抱いた困惑がおさまると、すぐに考え直し、彼はレオンに向けてスピードを上げた。

レオンに近づくにつれて奇妙なことに彼は眩暈を感じはじめた。おそらく、真っ昼間に赤茶けた山肌の小山の方から射す強い日差しを浴びたせいであろう。

小山にはワインの倉が立ちならび、どれも扉を開けていた。日差しでないとしたら、眩暈の原因は耕されたビート畑の長い畝(うね)からの照り返しだろうか。セメントで塗り固められた二本の灌漑(かんがい)用水路にはさまれたビート畑は、ずっと遠くのポプラ林まで続いていた。

眩暈の原因は外的なものに決まっている。青春時代に何年間か暮らしたレオンに 25 年ぶりに近づいているからといって、特別な感情も感慨もあるはずがない。それなのに、遠くにレオンの町の建物群が見え大聖堂の白いシルエットがほんの一瞬視界をよぎったとき、彼は眩暈だけでなく、説明のつかない不安

に襲われた。

彼がレオンに暮らしたのはほんの数年間である。そこは父親の最後の赴任地だった。一家の生活は、父親の頻繁な転勤のため引っ越しで明け暮れた。転勤のたびに、住居や近隣の環境、学校や友人、さらには言葉や食べ物や気候までが変わる。一家は父親の退職後この土地を離れたため、彼にはレオンとの強いつながりがあるわけではなかった。

にもかかわらず、レオンにいた頃にはなかった跨線橋を渡ったとき、最近建てられたらしい大マンション群のせいでひどく変化を遂げていたものの、町は今でも彼の記憶にある慣れ親しんだ表情をしていることに彼は気づいた。

車はパパラギンダ遊歩道沿いの道路を走り、グスマン・エル・ブエノ将軍の銅像の前を通り過ぎた。そしてラ・コンデサ通りに入ったとき、左手の緑地帯の中に音楽堂が見えた。彼は長い間その美しい建物の存在を忘れていたが、音楽堂を見た瞬間、一人の人物を思い出した。その人物は、ここ数年の彼の大切な思い出を押しのけ、記憶のすき間からぬっと姿を現わしたように感じられた。

マロニエの並木は深い色合いの青葉の繁った枝を広げ、枝葉は木の下に濃い影を作っていた。緑地帯の向こうを流れる川の岸辺には、かつて茨やポプラがすき間なく生え流れ着いた小石が堆積していたが、今では護岸工事がほどこされていた。しかし緑地帯は日の光を浴び、あの頃のまま穏やかでのんびりとした雰囲気だった。

音楽堂を見たとき彼が思い出したのは、ブロンドの髪の澄んだ瞳をした少女だった。彼女と知り合ったのは、彼がちょうど思春期に入る頃だった。当時彼の頭の中は、彼女とのめくるめくような恋の展開ではち切れそうだった。

少女は父親を亡くしたあと、看護師である母親に女手ひとつで育てられた。

母親は、義兄の経営する病院で働いていたが、その病院は町で一番大きな病院だったためか、なんとなくではあるが、少女には優越感のようなものが漂っていた。それでも彼女はにこやかで親切だった。

彼は彼女に手紙を書いた。ノートのページ半分を折りたたんで小さな三角形にしたものだ。彼はその手紙を毎日放課後、数学の復習のためにカルメル会の修道女たちが運営する塾に通っている彼女のもとに送った。配達人は、彼と同

じクラスの、近所に住む軍楽隊の楽士の息子で、にきび面の親切な少年だった。

こうして彼は澄んだ瞳の少女とつき合いはじめた。デートの最中、会話は始終とぎれた。歩くときは級友に見られないようにあたりに気を配って歩いた。学校で生じる少年たちの勢力争いを教科書にのっている叙事詩よりもドラマティックに彼は彼女に語って聞かせた。どれもこれも、なつかしさがこみあげる思い出だ。そして彼と彼女の恋のクライマックスは、ある午後、映画館でのことだった。二人はそこで手を握り合い、初めて頬を寄せ合った。

彼女を思い出すと、それまで気にかかっていた眩暈はしなくなった。かわりに、頭のまわりにかすかな反響音が響きはじめた。まるで潜水服か宇宙服を頭からすっぽりかぶせられたかのようだった。目に見えないヘルメットは彼に不可解な不安感を与えた。にもかかわらず、そのヘルメットをかぶると、彼は若い時分見たり聞いたりしたこの町のさまざまな色や光や音を正確に感じとることができた。そこで彼は、道路を迂回してこの町にやってきたのと同じように予定を変更して、中心街のホテルに行き部屋をとった。急いでしなければならない仕事はなにもないのだ。彼はこの町にとどまることに何の迷いも躊躇もなかった。

そのとき、突然、何人かの旧友の顔が脳裏に浮かんだ。とりわけはっきりと思い出したのは、やせっぽちで巻き毛の少年マルセリーノ・タスコン・リノだった。

見覚えのある倉庫が大通りの入り口にあった。突き当たりにはグスマン・エル・ブエノ将軍の銅像が見える。

箱や紙やひもの束が散らばって床がまったく見えない、迷宮のような倉庫に彼は入った。リノのことを尋ねると事務所に連れて行かれた。事務所は曇りガラスの張り巡らされた小部屋で、まるで浅瀬に座礁した潜水艦のように巨大な倉庫のどこからでも見ることができた。

そこに中年男がいた。彼はひと目でその男がリノだとわかった。突然やって来たことを弁解するために自分が誰だかわかるかと笑顔でリノに語りかけようとしたとき、リノは立ち上がり両腕を広げ驚きを表した。そして生徒から嫌わ

れる教師が必ずといっていいほど生徒にする仕草をまねた。まるでコルト銃を撃つように右手の人差し指を彼に向けたのだ。そしてこう言った。
「こちらにいらっしゃい、野ウサギ君」
話をしたかったが、リノは昼食後も仕事で空いている時間はなかった。そこで二人は夕食を一緒にとることにした。リノはほかの仲間も連れて行くと約束した。
「今でもここに住んでいるやつらだよ。四人の悪い仲間さ」
リノと別れたあと彼はエル・ベスーゴという名のレストランでひとりで昼食をとり、食後に町を歩いてみた。昔のことをゆっくりと時間をかけて思い出そうとしたが、しかし、今目にしているこの町と、昔暮らしていた町とをくらべることはしなかった。かわりにかつて町を歩いていたときに感じた思いと今の思いをくらべてみた。若かった頃は建物のファサードや城壁、歴史が刻まれた街角が慣れ親しんだものだけに見せるおどけた表情に彼は気づかなかった。町をぶらつくのは毎日の日課にすぎなかった。しかし今日はどの場所を見ても寂しく思えた。寂しさはまるで包帯のように、それまで彼が感じていた眩暈に巻きついていった。
この寂しさはどこから来るのだろうか？
彼はこの町—レオン—のほかにもいろんな町に暮らした。それらの町でも学校で多くの友人ができた。偉そうな態度をとる教師の悪口を、陰でみんなと言い合って憂さを晴らしたり、たくさんのガールフレンドとつきあったりもした。彼女たちとデートしては、冬の短い夕暮れどき、立ち並ぶ街灯の下や、春の暖かな日ざしの中で口づけをかわした。それぞれの町にそれぞれに思い出があった。
にもかかわらず、とくにレオンの町に彼は強い郷愁を抱いていた。当時の町の匂いを今でも忘れずにいたし、この町に住んでいた人々の顔や彼らの仕草、さらには折々に感じた思いをよく覚えていた。ほかの町をこんなになつかしく思うことはなかった。
夕食には五人で行った。彼とリノのほかに、サッカーのうまかったデ・ラ・リャマとヘスス・フォルガド—またの名はスソ・イ・チョリ—、それにラ・ペ

ルファというあだ名でみんなが呼んでいた図体が大きく動きが鈍かった—当時から老けていて無口だった—男の三人だ。

その夜、五人は大いに飲んだ。彼以外の四人は、彼が自分自身について話すのを間違いなく期待していた。自分の意志ではなくふとした偶然に導かれてこの町に立ち寄ったという思いと、酒に酔っていた勢いもあり、彼はざっくばらんに自分のこれまでの人生を語ってみようという気になった。

まずは冗談まじりに、結婚に失敗したことや自慢できない仕事について話した。そして旅をした異国の国々には謎もなければ秘密もなかったと語った。

いってみれば、結局、世界はどこにでもある部屋よりもほんのすこしだけ広い部屋のようなものだ。装飾が少しばかり多く、テーブルが少しばかりたくさんあり、人が少しばかり大勢いる場所にすぎない。どの土地でも同じような行為が繰り返され、人は同じような不幸な目にあっている。世界はどこでも本質的に違いはないのだ。

話している最中、彼らが困惑しているのがわかったので、ありきたりな話題に彼は切り替えた。25年ぶりにここに来た彼がずっと驚いていることだ。

それはレオンの繁華街ウメド地区が活気あるひどくしゃれたスポットに変わっていたということである。彼らがまだ若かった頃この地区を歩いていたのは、彼らのほかに老人と言ってもいい大人の酔っ払いだけだった。

ベレー帽をかぶった老人たちの間をすり抜けながら古くからある酒場をはしごしているとき、ウメド地区は断末魔にあえいでいるように見えた。ウメド地区で遊ぶ最後の世代は自分たちだと彼は思っていた。そのため、酒場から酒場—ロス・ペラーヨス、ラ・ヒターナ、エル・ブーロやベニートという名前の酒場—をたどりながらワインを飲むことは、まるで臨終の時を知って終油の秘蹟にあずかる儀式のようなものに彼には思えた。

ところが彼の予想に反して、この地区は今も盛り場として生きのびていた。それどころか活気を取り戻してさえいた。

彼がこの事実にひどく驚いていたのに対し、仲間の四人はあまり関心を払っていなかった。たしかにウメド地区は生き延びた。しかし大きな変貌という甚大な犠牲を払っていた。

現在のウメド地区はかつてのウメド地区とは明らかに異なっている。客層も酒の飲み方も話す話題も当時とはまったく異なっている。今の騒々しさはかつてのにぎわいとは似ても似つかぬものだった。

「それにくわえてな」とリノが大笑いしながら言った。「エミリンも死んじまったんだぞ」

宝くじ売りのエミリンは亡くなっていた。エミリンは子供の時のまま背が伸びなかった。

ドン・クラウディオは例の仕事をやめた。ドン・クラウディオの仕事とは、右腕の先に大事そうにネクタイをぶら下げては、ネクタイと一緒にこっそり当時販売が禁止されていたポルノ写真を売ることだった。

ロス・ティミドスという会の会長だったペリーネスも亡くなった。ウメド地区がひじょうに個性的—職人肌の男の集まりであると同時にボヘミアン的—であることに貢献していたものは一人残らずいなくなっていた。

眩暈はまだ続いていた。

そのとき彼の脳裏にもう一人別の男の顔が浮かんだ。昔この地区でよく見かけたやせた年寄りの男を彼は思い出したのだ。老人はつやのない灰色の髪の男で、一杯おごってもらうために彼らのいるところに時々やって来た。その記憶はたちまち彼を悲しい気分にさせた。

「大酒飲みだったあの男はどうした？　やせこけた、ひどいアルコール中毒の男だ」と彼は男のことをみなに尋ねた。

四人は彼をじっと見つめ、男を思い出そうとした。彼はチョリの腕を揺すぶりながらこう言った。

「そうだ、思い出した。やつは靴屋だった」

みんなは一斉に男の名前を叫んだ。

「グンドだ。エル・サンバと呼ばれていた」

男の名前を聞いた瞬間、不思議なことに、眩暈に巻きついていた包帯のような寂しさが鋭いナイフで切り裂かれたように感じた。包帯がほどけて彼は自由になった。

「死んだよ」とチョリは答えた。

エル・サンバと呼ばれていたグンドという男の死にざまは、町の伝説の酔いどれにふさわしいものだった。夜明け方グンドは酔っ払ったままグラノ広場の建設現場で眠ったらしい。そのあと、工事用の砂を積んだトラックが、眠っていたこの男の上に砂をぶちまけた。ぐでんぐでんに酔っ払っていたグンドはそのことに気づかなかった。数か月後、建設作業員が山と積まれた砂を使い切ったとき、グンドの遺体が発見された。

「身体の外をおおった砂と身体の中に残っていたアルコールのおかげで、遺体に損傷はまったく見られなかった。もちろん体重は 15 キロほどもなかったがな」とチョリは言った。

酔いどれグンドのすさんだ生活にふさわしい前代未聞の最期を聞いたとき、彼はその男が語った奇妙な話を鮮明に思い出した。

「不思議な男だった」と彼は言った。

「女好きだったよな」と友人たちは言った。「あんなに飲まなきゃ、よかったのにな」

突然彼は、なんとなくその男が自分にとって鍵を握る男ではないかと胸が騒ぎだした。みすぼらしい酔いどれ男の中に隠されている鍵を、是が非でも解き明かしたいという衝動に駆られた。酔いがまわっていたせいかもしれない。

男は、この国が共和制になったとき妻と三人の子供を捨て、書置きも残さずに南米に渡ったらしかった。そこで 20 年ほど暮らし、その間にもう一度結婚すると何人かの子供をもうけた。しかし結局、うまくはいかなかったようだ。再び家庭を捨てこの町に帰ってきた男は、最初の家庭にもどろうと、元の妻との関係修復を試みたが、やはりこちらもうまくいかなかった。

子供を育て上げるためにさんざん苦労をさせられた妻は、男に対して憎しみを隠すことはなかった。子供たちは母親の側について、そこから離れることはなかった。

二つの家庭をつづけざまに失い、男は人が変わってしまった。生きていくための手段も持たず気力をなくした男は、物乞いと酒を飲むことだけに日々を費やした。

酒場では町の者が男を歓迎したが、腹の底に軽蔑と嘲笑を隠していた。醒めることのない酒の酔いで浄化されたかのような素直な気持ちで、男は一心に突飛ないろいろな話をした。そして自分の哀れな身の上を、人知では計り知れない運命のいたずらのせいにした。

ある夏の夕暮れ、リノとチョリと彼は馴染みの酒場ベニートの中庭でマリネをさかなにワインを飲んでいた。褐色の建物に囲まれた中庭を心を落ち着かせる穏やかな静寂が支配していた。時折りアマツバメの鋭い鳴き声や、広場やカーニョ・バディーリョ通りで遊ぶ子供たちの叫び声が聞こえたが、それらが静寂を一層きわだたせた。

薄暗い酒場の中にある長テーブルの表面は、外からさし込む西日のおかげでくすんだ光を放っていた。そのとき、開いた扉のすきまから男が酒場に入って来るのが彼らの目にとまった。チョリはワインの小瓶を持ち上げながら男に呼びかけた。

「グンド、おれたちと一杯やらないか」

グンドはチョリを見かけるといつも、哀れを誘うような卑屈な態度をとった。昔チョリの父親の経営する靴屋で働いていたのだ。家庭を持ったあともチョリの家族のために働きつづけた。

グンドはチョリの母親に作った靴の話をよくした。それも卑猥な感じのする感傷的な冗談を交えて。

「クリステタ奥様のおみ足に口づけできたらねえ。あの白いおみ足にさ。奥様には、わしのこの手で何足もの靴を作ってさしあげたんだ。ああ、すぐにでも、その靴でわしを踏みつけていただきたい。腹や脳天を打ち砕いていただきたい。だけど、今のわしときたら、豚に投げる野菜の皮くずよりも取るに足らないものだものなあ」

こう言うと、グンドはいつも泣きだすのだった。広げた両手は激しく震え、顔は新芽のように赤紫色を帯びてくる。そのときを待っていた常連客たちはグンドに質問を浴びせ始める。一連のまとまりのないでたらめな告白をグンドは

無理やりさせられ、そして最後に常連客たちはいつもどおりの歓声をあげて、グンドへのからかいは終わるのだった。

チョリに声をかけられたグンドは重たげに足を引きずりながら彼らのところにやってきた。型どおりのあいさつをすませると、長いすの端に座った。その日グンドはとても穏やかな様子だった。そこでチョリはこう言ってグンドをからかった。

「涼んでいけよ、グンド。もっとも、あんたは熱帯に暮らしていたんだから、こんな暑さ、どうってことないだろうけどな」

挑発されてもグンドは普段の様子とは打って変わって物静かだった。その日はまだ酒を口にしていなかったからかもしれない。グンドはコップにつがれたワインを、まるで舌と歯で噛み砕くようにして一口飲んだ。そして、こうつぶやいた。

「わしは熱帯になぞ行っていない。熱帯のことなどなんにも知らない」

チョリはリノと彼に目配せした。

「おやおや、グンド。今さらなにを言いだすんだい。20年南米で暮らしたんだろ。あっちの女たちといい思いをしたんだろ」

いつもなら酔っ払っているためいい加減な返答しかしないこの男が、今日ははっきりと首を横に振った。

「20年どころか、20分だっていなかった」

グンドは記憶の下にしまいこんだ秘密を唐突に明かそうとした。あの暑い夏の日、黄金色に輝いていた夕暮れの光景を正確に再現しようとした。

たばこの煙がたちこめる酒場の中から、明瞭には聞き取れない人のざわめきが聞こえてきた。

グンドはテーブルの上にコップを置くと、重ねた両手にじっと視線を注ぎながら、誰に聞かせるともなく話し始めた。

「わしは南米になぞ行っていない。あの日夜が明けると、狩りをしようと銃を持って家を出た。うだるような暑さだった。太陽は容赦なく照りつけた。わし

は鷓鴣二羽とウサギ二匹を仕留めたものの、家から遠く離れたところまで行ってしまった。ずっと遠くまでな。家に戻ろうと思ったとき、空を覆うほどの大きな雲が下りてきた。たちまち雷がとどろいた。次に稲光、そして豪雨だ。わしは藁ぶき屋根の小屋を見つけた。なんにもない原野に一軒だけの小屋だ。飛び込むと、中に三人の女がいた。編み物をしていた女たちは、わしに椅子に座るよう勧めると編み物をつづけた。かまどには火が勢いよく燃えていた。外はうだるように暑かったにもかかわらず、それでも小屋の中は寒かった。その時のわしの心はおだやかで、いろいろな音に耳を澄ませていた。雷鳴や雨が屋根に落ちる音、たきぎのはぜる音、女たちの編み棒を操る音と彼女たちのぶつぶつ言う独り言。突然、列車の警笛が鳴り響いた。わしは立ち上がると悪態をついた。列車に乗り遅れてしまったのだ。一番年嵩のかなり年配の女がわしに言った。心配しなくてもいい。一晩ここで過ごせばいい。長椅子で眠ればいい。そして女たちはわしにスープを出すと床についた。疲れていたのでわしもたちまち深い眠りに落ちた。

目が覚めたとき身体中に痛みを感じた。家の中はしんと静まり返り、雲からもれる薄日が、半ば崩れたわら屋根の裂け目をとおして、わしの顔の上にうっすらと射していた。かまどの火は消えていたが、小屋の中には霧が立ち込めていた。最初、煙が立っているのかと思った。しかしすぐにそれはクモの巣だとわかった。ほこりがついたクモの巣が包帯やぼろ布のように見えたのだ。

わしは即座に家から持ってきた猟銃をつかんだ。それは酸化して屑鉄のようになり、銃身はさびで腐食していた。昨夜仕留めた鷓鴣やウサギはどこにも見当たらなかった。わしはそれらをつけていたベルトのまわりをまさぐってさがそうとした。すると何かの破片のようなものがカチンカチンと鳴った。小さなたくさんの骨が床に散らばった。床の上には土くれや腐った藁が積もっていた。

わしの身体の上には毛布がかかっていた。わしはそれをつかんだが、それはわしのあごひげだった。あごひげはひざのあたりまで伸びていた。髪の毛は立つと背中に触れ、腰の下まで届くほどだった。わしは急に怖くなった。死にそうなほど怖くなった。着ていた服は着古されたようになり破れそうだった。長く伸びたあごひげをジャンパーの中に入れようとすると、ボタンはふっ飛んで

しまった。

わしは廃屋を出ると駅へ向かった。ちょうど列車が駅に来たので、迷わず飛び乗った。乗客はほとんどいなかった。わずかばかりの乗客はみな一様に唖然とした表情をしてわしを見た。わしは車掌を見つけると切符を買おうとした。金を差し出すと車掌は不思議そうに金を見て、それからわしの身体を上から下まで眺めた。おびえているようだった。そして切符は売らずに金を返しながら車両のすみにわしを連れて行き、そこに座っているようにと指示すると、どこかへ行ってしまった。一刻も早くその場から逃げ出したそうな素振りだった。

車掌だけじゃない。乗客の誰もがわしを避けた。くじのついたキャラメルを売っていた売り子でさえ、わしにくじを引かせようとはせず、あわててわしの横を通り抜けた。売り子がわしから視線をそらしているのがわかった。

次の駅に着くと、わしは列車から降り、その足で行きつけのセネンの床屋に向かった。途中、通りでは誰もが振り返ってわしを眺めた。

床屋ではヘリンが働いていた。パコのかわりに知らない男がいた。ヘリンだと思っていた少年もよく見るとヘリンではなかった。セネンは新聞を読んでいた。わしはセネンに呼びかけた。セネンはわしを見るとぎょっとした表情をした。わしは鏡の前の椅子に座ると、ジャンパーから長く伸びた髪の毛とひげを出した。子供らが窓越しに呆然とした表情でわしを眺めていた。やつらはわしが駅から歩いてくる間ずっとわしのあとをついてきた。セネンは店の外に出るとニワトリを追い立てるように子供らを追い払った。それからぶつぶつ言うのをやめて、黙って仕事にとりかかった。気の毒なことにセネンの髪の毛は真っ白になっていた。お愛想笑いをしたセネンの口もとからは入れ歯がのぞき、ほほ骨に刻まれた深いしわが目についた。それらはわしを不安にさせた。

まずセネンはわしの長く伸びた髪の毛を切った。時々少年が切られた髪をほうきで掃き、奥まで持って行くと中庭に捨てた。それらは一メートル半ほどもの長さがあった。髪を切り終わるとセネンはあごひげに取りかかった。はさみで首の下のひげを切りはじめた。セネンはおしゃべり好きだったはずなのに、お通夜のときのように押し黙ったままむずかしい顔をしていた。わしも何も言わず、短い間に起ったいろんな出来事に疲れてぼんやりしていた。

セネンの白髪はわしをますます困惑させた。やっとセネンはわしのあごひげを丁寧に切り取り、最後にわしの顔に石鹸をぬるとカミソリでひげを剃りだした。わしは目を閉じ、顔にセネンの手が触れるのを感じた。剃り終わるとセネンはわしの顔を上に向け顔の上に蒸しタオルを置いた。それからわしの髪の毛にオーデコロンをかけると櫛を入れた。わしは鏡に映った自分の顔を見てびっくりした。ひどくやせて顔色も悪かった。ほんの短い間にわしは老人になっていた。

頭のうしろが見えるようにとセネンはわしのうなじに手鏡を当てようとした。そのとき、面前の鏡に映ったセネンとわしの目が合った。セネンの目はわしが誰なのかわかったと言っていた。セネンは自分の胸に手鏡を押しつけると、『グンド』とわしの名をつぶやいた」

グンドのひとり語りはそこで突然中断した。いつのまにか日は暮れていた。みな呆然としたまま我に返った。チョリはひと言も言わずにグンドのグラスにワインをつぎ足した。

「南米なんて論外だ」とグンドは言った。そして一息にワインをあおった。「これがわしの人生のすべてだ」

グンドは席を立った。ある気品のようなものを漂わせようと努力していた。たぶんグンド自身が、自分の話がリノとチョリと彼に与えた衝撃に感動していたからだろう。何も言わずに出て行くグンドを三人は黙って見送った。

グンドの話を思い出したにもかかわらず、そこに彼は鍵を見つけることができなかった。飲み過ぎたためなのかワインはうまくなかった。彼はひとりになりたかった。胸騒ぎの原因がなんなのか、落ち着いて考えてみたかったのだ。

しかしなかなかひとりになれなかった。中年になった友人たちは今では夜遊びなどめったにすることもなかったのに、夕食後騒々しい酒場を何か所かはしごした。結局彼がお開きにすることをみなに納得させた。五人はチョリの車に乗った。

彼はチョリにラ・コンデサ通りで降ろしてくれるよう頼んだ。ひとりで歩き

たかった。彼が四人としつこいほどの別れのあいさつを交わしたあと、チョリの車は発車し、テールライトが遠ざかっていった。彼はやっとひとりになれた。

春の夜だった。川が流れるように山から強い香りが漂ってきた。藪や草の甘い香りと牧場や草原の匂いだ。空には雲ひとつなかった。晴れわたり澄んだ夜空に多くの星がまたたいている。彼はゆっくり歩いた。靴音が歩道にこだました。歩き疲れて音楽堂の近くにある木のベンチに腰をかけた。彼はうしろに身体をのけぞらせ、葉の茂みをじっと見た。

この場所に今、自分がいようなど、ほんの数時間前には考えてもみなかった。すっかり忘れていた若い頃のいろんなことを急に思い出そうなどとは想像もしなかった。不思議な展開に驚くばかりだ。

グンドという酔っ払いの話は、自分にとって特別な意味を持っているかもしれない。夕食のとき突然感じた胸騒ぎはおさまっていたものの、この思いは彼の心から離れずにあった。

いつのまにか彼は眠り込んだ。

はっと身震いして目が覚めたとき、先ほどまでの静寂が嘘のように騒がしい声があたりに響いていた。ラ・コンデサ通りの緑地帯は活気にあふれていた。ベンチというベンチには母親や子守りの女が座り、子どもたちは大声をあげて走りまわっていた。遠くの方からはサイレンの音と、パパラギンダ通りのずっと向こうに設置されたメリーゴーランドのにぎやかな音楽が聞こえた。すぐそこの歩道では、マハターダと呼ばれる行者のかっこうをしたインド人の芸人が地面に座って、広げた毛布の上にきちょうめんに電球や釘を並べている。物見高い群衆がインド人のまわりを取り囲み、インド人は電球や釘を飲み込もうとする。

彼は高校の卒業祝いにもらった腕時計を見た。そしてベンチから立ち上がると、音楽堂へ向かって歩きだした。すると澄んだ瞳の少女がこちらにやって来るのが見えた。少女は黄色い花柄のスカートを着ていた。彼は胸の高鳴りを感じた。今日は土曜日だ。季節は夏だ。ポケットには少しだけれど金がある。ああ、今日は一日彼女といられる、と彼は思った。

作者紹介

ここに訳出したのは、José María Merino 著、*El anillo judío y otros cuentos*, Castilla, Valladrid, 2005 所収 "La noche más larga"である。この短編集には 13 編の短編がおさめられている。

作者であるホセ・マリア・メリーノは、1941 年スペイン北西部の自治州ガリシアの港町ア・コルーニャに生まれ、幼い頃、隣接する州カスティーリャ・レオンの古都レオンに移り住んだ。首都マドリードで法学を学んだのち、1972 年詩人としてデビューした。*Novela de Andrés Choz* (1976)以来、小説家としてこれまで多数の作品を発表し、ミゲル・デリーベス文学賞(1996) やラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ文学賞 (2004) など多くの文学賞を受賞している。2008 年、スペイン王立アカデミーの会員に選出された。さらに 2013 年、*El río del Edén*(2012)で国民文学賞を受賞した。主な作品は、*La orilla oscura* (1985)、*El centro del aire* (1991)、*Las visiones de Lucrecia* (1996)、*Los invisibles* (2000)、*El heredero*(2003)、*La sima*(2009)などである。

解説

再生の物語としての『いちばん長い夜』
――『いちばん長い夜』に関する考察――

『いちばん長い夜』は、一夜のうちに白髪の老人になったと語るグンドの「奇妙な話」が強烈な印象をあたえるため、『浦島太郎』のような淹留譚(えんりゅうたん)をテーマとした物語のように思える。

しかし『いちばん長い夜』は、若さを失った中年男である「彼」の再生の物語だと考えられる。25年ぶりに偶然立ち寄ったレオンで、かつての仲間と出会ったり、当時のなつかしい思い出にひたったりすることで、「彼」は若々しい活力を取り戻すのである。

「彼」はどうして、当初行く予定ではなかったレオンに行く羽目になったのだろうか。それは「迂回路」という「思いがけない指示」があったためだ。
「迂回路」とは「彼」をレオンに導き入れるために作者が仕組んだ通路だと思われる。
「彼」が「迂回路」を通ってレオンへ入り込むと、レオンで「彼」の身に不可思議な事象が生じる。
「藁ぶき屋根の小屋」で眠っているあいだに20歳年老いたという「奇妙な話」をグンドから聞いたのを思い出した「彼」は、ベンチで眠ったあと眠りから覚めたとき、グンドとは反対に若返える。

このようにレオンとは、何らかの不可思議な事件が起こる異界なのである。「彼」は「迂回路」という通路を通って、「レオン」という異界へ入り込んだのである。

「レオンに近づくにつれて」、「彼」は「奇妙なことに眩暈を感じはじめる」。そして、レオンの町に入ると、「彼」は「眩暈」だけでなく「説明のつかない不安」に襲われ、「寂しさ」さえおぼえる。

どうして「彼」は「眩暈」を感じたり、「不安」や「寂しさ」を抱いたりしたのだろうか。

また、「彼」の仲間や知り合いには名前があたえられているし、名前が明かされていない「澄んだ瞳の少女」には家庭環境や性格が記されているにもかかわらず、作者は読者に「彼」の名前を知らせないし、「彼」に関する情報もあたえない。

これには作者のどんな意図がこめられているのだろうか。

「眩暈」を感じることと「彼」が顔の見えない無名的存在であること、これら二つの問題は関連していると思われる。

今では人生に疲れた中年男になってしまった「彼」にとって、25年前のレオンでの暮らしは実に楽しいものだった。しかし、そのことをレオンに来るまで「彼」は忘れていた。レオンに「特別な感情も感慨もあるはずがない」と思っている。ところがレオンに近づくにつれ、忘れていた青春の思い出が意識下で蠢(うごめ)きだす。それが「彼」に「眩暈」を感じさせるのではないだろうか。

実際、レオンの町に入ると、景観は昔とは変わったものの、レオンは自分に対して「慣れ親しんだ表情をしていること」に「彼」は気づく。それから、次々に思い出が記憶の底からよみがえり、それらをなつかしむことになる。まず、音楽堂を見たとき、思春期に初めてつき合った「澄んだ瞳の少女」を思い出し、彼女とのつき合いは「なつかしさがこみ上げる思い出」だったと感じる。次に、旧友リノが脳裏に浮かび、リノを含めた四人の仲間と再会すると、昔話で盛り上がる。

こうして、「彼」の心は昔のレオンに引きもどされていく。

「彼」はレオンに「強い郷愁」を抱いていたことを認め、レオン以外の「ほかの町をこんなになつかしく思うことはなかった」と自覚するまでになるのだ。

「彼」にとってレオンでの青春時代は楽しいものだったのだ。

それに対して、現在の日々が充実しているとは言いがたい。「彼」は「結婚に失敗」し、「エル・ビエルソ郡のどこかの村」で週末を一人で過ごそうと考えるほどの孤独の身だ。「自慢できない仕事」についていると言う。家庭はうまくい

かず、仕事にも誇りを持てないのである。そして、「世界はどこでも本質的に違いはない」とうそぶく。世界の異質な文化やさまざまな人に出会っても感動することはないのだ。「彼」は青春時代のみずみずしい感受性や自信を失い、世の中を斜めに見ている。要するに、「彼」は感動を忘れたごくありふれた無個性な中年男なのだ。そのため「彼」は「彼」のまま無名的存在であり、作者によって性格描写もされないのである。

昔とは「似ても似つかぬ」代物に成り果てたウメド地区のように、「彼」は溌剌(はつらつ)とした昔の「彼」とは別人のような中年男になってしまった。その「彼」がレオンに向かうことになったとき、忘れていた若い日々の思い出が「彼」の意識下を揺さぶりだしたために、「彼」は「眩暈」を感じ、「説明のつかない不安」に襲われるのだ。そして町に入ると、「かつて町を歩いていたときに感じた思いと今の思い」の間に溝ができてしまったことに「彼」は「寂しさ」を感じるのではないだろうか。

そのため「彼」は、グンドの名前を聞いたとき、「眩暈に巻きついていた包帯のような寂しさ」が切り裂かれたように感じるのだ。それは、昔グンドが語った、一夜で 20 歳年老いたという「奇妙な話」が記憶の底から立ちのぼってきたからだ。そして、「その男が自分にとって鍵を握る男ではないか」と「彼」は思う。

「彼」は、時間を飛び越えたというグンドの話の中に、過去の自分と現在の自分の間に横たわる心のギャップを埋めるヒントが見つかることを期待していた。

しかし、グンドの「奇妙な話」を思い出しても、そこに「鍵」は見つからなかった。そのかわり、「彼」の身に不可思議な事象が生じる。ベンチで眠り込んだ「彼」が目覚めたとき、「彼」は 25 年前の青春時代にもどっていたのだ。

『いちばん長い夜』とは、「彼」がベンチで眠って 25 年を飛び越えた夜のことなのである。

だが、ひとが時間を飛び越えることなど現実に起こるはずがない。グンドの話も「彼」の体験も、実際に起こったとは信じがたい。

しかし、重要なのはこの点ではない。大事なのは、グンドの話と「彼」の体験した内容が共通の展開をしながらも、反対の結果で終わるということだ。そして、その点から、「彼」は生き生きとした力を取り戻すであろうことが読み取れるのである。

グンドの話の導入部は次のようなものだ。

ある夏の夕暮れ、狩猟を終え獲物を手にして家に帰ろうとしたグンドは、突然の豪雨に襲われたため、やむなく「藁ぶき屋根の小屋」へ飛び込む。

この導入部は、予期せぬ「迂回路」の指示によってレオンに入り込んだ「彼」の体験と同じ始まり方である。そして、「藁ぶき屋根の小屋」で眠ったグンドは目を覚ましたとき、時間を飛び越えている。一方、ベンチで眠り込んだ「彼」も眠りから目覚めたとき、グンドのように時間を飛び越えた。二人とも同じように、時間を移動するのである。

作者は、二人に、それぞれ「迂回路」と「豪雨」という通路を与えることで、「レオン」と「藁ぶき屋根の小屋」という異界へ二人を導き入れて眠りに誘い込んでいるのだ。ここでは、眠りが彼らに時間を飛び越えさせるための装置として利用されている。

このように、作者は、「彼」とグンドが共通の体験をするよう意図しているのである。

ところが、作者は眠りから覚めた二人にまったく逆の結末を与える。逆方向の時間に二人を移動させているのである。

グンドは眠りから覚めると、20 年の歳月を失い年老いた。「彼」はグンドとは逆に、眠りから覚めると 25 年の時間を取り戻し若い頃にもどっている。二人は時間を飛び越えるという点では共通しているが、時間のベクトルは逆向きだった。作者は結局、グンドからは 20 年という時間を奪い老いた人生を押しつける一方、「彼」には25年さかのぼらせ若さを取りもどさせているのである。

眠りから覚めたとき、「彼」は多感な若者に生まれ変わっている。そして「澄んだ瞳の少女」がやって来ると、ポケットにわずかしか金がなくても、「ああ、今日は一日彼女といられる」と喜びを素直にあらわす。「彼」は、もはや白けた

中年男ではない。「胸の高鳴り」を感じる青年にもどったのだ。

この最終場面は、レオンを通過したあとの「彼」の生き方をあらわす象徴的な場面であり、作者はここで、「彼」には今後新たな人生をやり直せる希望があることを示唆していると考えられる。

老人になったグンドは、そのあと哀れな最期をとげた。グンドとは反対に「彼」は若返った。ということは、作者は「彼」に活力を取り戻させたのではないだろうか。

「レオン」という、「彼」にとってはなつかしさであふれる異界を通過することで、「彼」は新たな人生へと旅立っていけるのだ。

『いちばん長い夜』は中年男の再生の物語なのである。